アキレウスの盾の描写（*Ilias* 18.478–613）とアキレウス[*1]

安西眞

1

本稿は一見、『イリアス』の一部の解釈論のように見えるかもしれない。しかし、文学的な解釈は筆者の意図するところではない。意図するところは、表題の問題を契機にした『イリアス』に於ける「ホメロス問題」論である。もっと正確にはそれを目指す仕事の一部である。

Schadewaldt (1) は、150 年に及ぶ分析論者たちの歴史をほぼ終焉させ、詩として創造物としてホメロス叙事詩を見る正しい方向を示した画期的な研究である。一方で、第二次大戦後になって広く知られ、多くのギリシア叙事詩研究者たちの貢献を集めた口承叙事詩論は、それが理論としての一巡りを終え、なしうることはほぼなし終えたと見える。『イリアス』や『オデュセイア』を、広い意味での文学的な全体として見ることができるのか。ひとりの詩人に帰することも可能な文学的な意味での全体を構成しているのか。そのことを示す方法はどのようなものであるべきか。これらの問題に、口承叙事詩論はほとんど無力であることも分かった[*2]。

---

*1 本稿は以下を基本文献とし、稿中では、研究者の姓（あるいは姓と番号）だけで指示することとする。本稿はこれらの研究との対話の産物でもあるので、これらの研究の著者、特に Schadewaldt に対する謝意をここで表明しておきたい。

1) W. Schadewaldt (1), *Iliasstudien*, Leipzig, 1938.

2) W. Schadewaldt (2), *Von Homers Welt und Werk*, Tübingen, 1965（「アキレウスの盾」を論じた章は、352–374）.

3) K. Reinhhardt, *Die Ilias und ihr Dichter*, Göttingen, 1961（「アキレウスの盾」を論じた部分（401–411）は、Der Schild des Achileus, *Freundesgabe für Ernst Robert Curtius*, Marburg 1956 に掲載された論文の再録であるが、再録版に依拠して言及する）.

4) W. Marg, *Homer über die Dichtung; der Schild des Achilleus*, Münster, 1971.

*2 口承叙事詩研究は、ギリシア叙事詩のアオイドスとなることは、ギリシア叙事詩言語という特殊な言語を駆使しうる能力を身につけることに他ならないということを明らかにしたと言える。もし、この比喩がおおむね正しければ、上に指摘した事情も理解が容易であろう。口承叙事詩の詩人になることは、特殊ではあるが、しかし言語の一種と言えるものを獲得することに他ならないのであれば、口承叙事詩研究はすなわち言語記述の一種だということになる。従ってこの研究方法には、ホメロス叙事詩の文脈性を明らかにする力は備わっていない、と考えるのが論理的であろう。

以上のような合意が今ホメロス研究には見える。では口承叙事詩論にそれ本来の場所を割り振るとして、我々はどこに向かえばよいのか。戦後の口承叙事詩論をめぐる熱狂の中で霞んでいた、大戦間の Schadewaldt (1) (2) や Reinhardt のような仕事[*3] を見直して、そこから再び始めよう、という方向性が見える[*4]。筆者には歓迎すべきことであるように思える。

Schadewaldt (1) は確かに深く広い洞察に裏付けられた、そして画期的という賛辞付きで呼ばれてよい労作である。しかし、不遜の誹りを恐れずに言えば、『イリアス』最後の詩人の仕事を見究める為には、ひとつ大事な視点がここには抜け落ちている。その欠点の所在すら理解されていない、と言うことさえ出来る[*5]。『イリアス』に関わる筆者の最近の仕事はその点を補うという目論見でなされてきた。だがこのことは具体的な問題を前にして議論しよう。

2

アキレウスの盾の描写（*Il.* 18.478–613）は、『イリアス』を構成する部分としての人気は高く、これを扱った論考は少なくない。本稿はしかし、ほぼ上のような研究史的見通しに基づいて、（注）1 の 4 つの論[*6] を中心に据えて、議論を進めていく。この 4 編のうち、「盾」を正面の対象に据えた 3 編は、盾の描写がそこに置かれているという事態をそれぞれ独自の場所から把握し、その事態を作り出した詩人の側の「意図」を論じている。だがこれらの 3 編は共通点を持っている。しかも否定的な共通点である。

盾の表面に描かれたと報告される図柄を「画面」ごとに言葉で説明すると以下のようになる。中心に置かれた大地と天空（483–489）。枠を構成するオケアノスの流れ（607–608）。その間を占める二つのポリスをめぐる二つの場面（491–508; 509–540）。種まきを準備し

---

*3 発表年と符合しないものが多いが、改訂版が現在標準となっている場合が多いからである。それぞれの「まえがき」等を読めば、書物の内容の大半が当該の時期に属するものであるといってよいことが解る。Reinhardt の仕事は没後編集された。長い期間にわたって書き貯められた原稿がもとになっていることは間違いない。P. von der Mühll, *Kritisches Hypomnema zur Ilias*, Basel, 1952 への言及も見られることから、この書物に書かれたすべての文章を大戦間期に帰することは不可能である。しかしこの書物が Reinhardt 自身の教師である U. von Wilamowitz-Moellendorf の書物（*Die Ilias und Homer*, Berlin, 1916）との深刻な対話であることを考えれば、基本的に大戦間期の研究だと言っても大きな間違いではないだろう。

*4 C. Macleod (ed., com.), *Homer, Iliad Book XXIV*, Cambridge, 1982 をもってその嚆矢とする。

*5 彼のこの本では第 18 巻の問題は論じられていない。従って描写されている世界とアキレウスの関係も論じられていないが、そのことを言っているのではない。欠落はもっと根本的なところにに見られる。

*6 Schadewaldt (1) は、「アキレウスの盾」を真正面から論じている部分を持たない。だが「アキレウスの盾」の理解は『イリアス』全体の語りとしての構造の理解と、私見によれば不可分である。従って、作品全体の構造を初めて明らかにしたと言ってもいい Schadewaldt (1) は、「アキレウスの盾」を論じようとする者には、深刻な対話の相手にならざるをえない。

ている畑の様子を描く場面（541–549）。麦の刈り入れの場面（550–560）。収穫期の葡萄園の図（561–572）。川沿いの牧草地に急ぐ牛たちとそれを狙うライオンの群を描く場面（573–587）。谷間の牧草地だけを画材として示唆するだけの短い場面（587–589）。若い男女が楽しげに舞い踊る場面（590–606）。以上である。

この 100 行余りの、「小さな叙事詩」でもある「盾の描写」の中に、詩人がひとつの世界を閉じ込め、我々に伝えようとしていることは古くから認められていた[*7]。筆者もそれを認める。ただ、世界の包摂がどのような手段で達成されているかを詳細に振り返り、あるいはさらにその手段の奥にある方法そのものを明らかにすることは、本稿の目的そのものではない。

三つの「アキレウスの盾の描写」研究のどれにも不足していることが二つある[*8]。描かれた世界は「世界」一般か。もし限定句が付くとすれば、どういう限定なのか。これらは正面の問題にはならなかった。これがひとつ。この「世界」の描写と『イリアス』の主人公であるアキレウスとがどのように関係するか。これについても足りない。足りないどころではない。三つの議論のうち二つは両者の間に特別な関係はないと明言している[*9]。しかし『イリアス』が文学的なひとつの全体として統一ある構成を持っているとすれば、それはあってはならないことである。もし両者に関係がないということになれば、「アキレウスの盾の描写」は Schadewaldt (1) が明らかにし始めた『イリアス』という全体に組み込めない異物ということになってしまうほかないからだ。

3

「無関係」はあってはならないことであるが、同時にまた、ありそうもないことでもある。状況証拠にすぎないが、そう考える理由を述べる。盾に描かれているとされる図柄は盾の図柄としては、かなり異様なものだ。『イリアス』内ではアガメムノンの盾の描写（11.32–40）が比較の対象たりうる。『イリアス』の戦闘場面や、その他の関連する神話伝説的戦闘場面を題材に壺絵その他に描かれた古代の図像資料も参考になるだろう[*10]。盾の表面に単なる模様以外の絵が描かれる時、その図柄はゴルゴーの首であったり、猛獣・猛

*7 G. E. Lessing, *Laokoon*, Kap. 18, Anm. e：「少数の絵を使って、ホメロスはアキレウスの盾を世界で生起するあらゆることを包含できる魔法の容器に変えたのである（訳責は筆者）」。

*8 これは三つの研究に限らず、「アキレウスの盾」研究一般に見られる傾向である。

*9 Reinhardt, 405. ("Der Schild des Achilleus enthält nicht den geringsten Hinweis auf Achillis Wesen, Taten und Zukunft.")、および Marg, 24。Schadewaldt (2) も楯の世界を『イリアス』の世界とともに立つもうひとつの世界、そして、物語進行の「急」に対する「静」を作り出すもの、と見るからほぼ同じと言える。

*10 手近に見ることが出来るのは、Schadewaldt (2) の付録と、K. F. Johansen, *The Iliad in Early Greek Art*, Copenhagen, 1967.

禽であったりするのが圧倒的である。その図柄が持つ盾の絵としての実用的な意味は明らかだろう。盾の図柄の正面に立つ者、つまり敵に恐怖を覚えさせる等の事態を引き起こして、敵の戦意を削ぎ、戦闘能力を低下させる。これが盾の図柄の最大かつ唯一の実用的な目的だろう。

興味深い事実がある。Ps. ヘシオドス『アスピス（盾）』に、「ヘラクレスの盾の描写（141–320）」と呼ばれる、「アキレウスの盾の描写」の文学的模倣*11 がある。盾に描かれた図柄という方向から見ると、しかし両者の間に一点非常に大きな違いがある。ヘラクレスの盾の中央は、天と大地ではなく、ポボス*12（「恐怖」の擬人化神）の似顔によって占められている。『アスピス』の詩人は、自分が模倣しているアキレウスの盾のあまりの非実用性に耐えられず、折衷を試み、最も大事な場所（中央）にポボスを配置して、実用的な盾から遠いという感じを与えることを防いだ。こう説明すると、アキレウスの盾の文学的模倣であり、また実用としての盾という面から見れば手本の描写と決定的に異なりもする、「ヘラクレスの盾」の折衷的な描写を一番うまく説明できる。

盾の図柄の非実用性に関してもう一点付け加えたい。西洋古代文学史上、アキレウスの盾の描写と並ぶ名高い盾の描写がもうひとつある。アエネアスの盾の描写である（*Aen.* 8.626–728）。ウェルギリウスが語る図柄も盾の図柄としては非実用的だ。アエネアスの血統が担うべきローマの未来の光景が次々とそこには描かれている。この記述からだけでも盾の図柄と、この盾の持ち主となる叙事詩の主人公アエネアスとの関係が、詩としての水準で非常に濃いものであることは解る。アエネアスの盾の描写は、ローマの建国を歌う叙事詩の主人公であるアエネアスがいったい何者であるかを表現する上で、重大な役割を担っていることはこの指摘だけでも十分推測できるだろう。

ウェルギリウスの『アエネイス』が、ホメロス叙事詩の深い研究・学習の上に成立したものであることは常識に属する。研究・学習という言葉に何を盛るか、という問題はヘレニズム詩人であるウェルギリウス理解の核心でもある。だからここで言おうとすることはそのごく表面にしか関わらないことである。その軽薄を承知で次のことを指摘しておきたい。もしアキレウスの盾の描写が包含している世界と、叙事詩『イリアス』の主人公であるアキレウスとが、詩構成上いかなる関係も本当に持たないとすれば、ウェルギリウスは『アスピス』の詩人と、ホメロス叙事詩の学習・研究という面で全く同じだということになる。つまり主人公が叙事詩の中で行う唯一の戦闘の前にはその盾の詳細な描写を行う。

*11 ここで「文学的」ということの意味は、口承叙事詩に属する、言語としての広義の formulaic epic language の習得・使用では律しきれない、ということをひとつの定義とする。

*12 この像は、アガメムノンの盾にも描かれている（11.37）。

この形式的な点だけをホメロス叙事詩の伝統として学習・模倣したことになる*13。その盾の描写は、ウェルギリウスの場合、ごく表面的に見ても、アエネアスという主人公の造形にも、物語全体にも深く有機的な役割を果たしているように見えるが、それはウェルギリウスの独創だということになる。盾の描写をつうじてアエネアスについて何か重要なことを語るという手法については『イリアス』からは何も学ばなかったことになる。しかし、我々はアエネアスの母親である女神（ウェヌス＝テティス）が鍛冶の神（ウルカヌス＝ヘパイストス）に頼んで作ってもらった盾を、母たる女神が手ずから息子に渡すという盾の描写の設定に関わる入念な『イリアス』への言及（*Aen.* 8.370–453; 608–625 ～ *Il.* 18.369–482; 18.614–19.39）があることを考慮せねばならない。さらに図柄の盾としての非実用性という共通点も合わせて考慮すれば、この盾の描写に関してウェルギリウスが『アスピス』の詩人と同様、『イリアス』を単に形式的に学習・模倣しているにすぎないと考えることは極めて難しい。

さらにアキレウスに新しい盾が与えられるということそのものが、『イリアス』の全体構成に重要な役割を持っているという事実がある。盾の描写はそもそも、パトロクロスがアキレウスのもともと使っていた盾を含む武具一式を借りてアキレウスの影として戦場に姿を現し、そしてヘクトルに撃たれたという経緯の上に成立している。アキレウスのもともと持っていた盾は、パトロクロスの討ち死にをつうじてヘクトルの手に渡った。だからこそ新しい盾が必要となり、母親であるテティスが、自分のたったひとりの命短い息子の為に、と使用者を特定したうえで鍛冶の神に特注したものなのだ。この経緯は『イリアス』後半、盾の描写に至るまでの中心部を占めている。そういう詩的な充電を受けた盾がアキレウスの詩的な役割と無関係でいられるものであろうか。

それだけではない。Schadewaldt (1) は、『イリアス』の最終形を決めた詩人の入念な物語設計の跡を我々の目の前に明らかにしたが、彼の解明の中心に据えられたのが、ネストルがパトロクロスをそそのかす場面（11.794–803）である。ここでネストルは、アキレウスをアカイア軍の外に放置したままの形で、軍の滅亡を傍観させたままにしておくのは、パトロクロスをトロイアへと送り出した彼の父親の訓戒に背くことになると脅す。そしてもしアキレウスが現在どうしても戦場に出られないのならば彼の軍勢と武具を借りて君が戦場に出よ、とそそのかすのだ。この武具交換を中心とした提案が、『イリアス』の進行に大転換を与え、トロイア軍の防塁突破、パトロクロスの出陣と死、アキレウスの出陣

*13 そのようなことはVergilius研究者のだれひとりとして言っていない。しかし、アキレウスの盾とアエネアスの盾の関係については、R. Heinze, *Virgils Epische Technik*, Leipzig/Berlin, 1915 にも、G. Knauer, *Die Aeneis und Homer*, Göttingen, 1964 にも、はかばかしいことは何も書かれていない。ことがらの性質上はかばかしいことが書かれていない原因がホメロス理解の側にあることは確実である。

とヘクトル撃ち、そしてその後日談という『イリアス』後半部の構造を作り出す起点であり、基礎であり、従って『イリアス』は単一の構想の上に成立していると言える、とする Schadewaldt (1) の解析は極めて説得的である。また、『イリアス』前半は、ネストルのこの提案を導くべく構成されている、という彼の解析もまた説得的である*14。第 14 巻の冒頭で、ネストルの盾は息子が使用中であることが言及されるが（14.9–11）、それはこの後半部の基礎構造材を聴衆の心の中で維持するための手段であろうという Schadewaldt (1) の指摘にも筆者はうなずく。

さらなる指摘を加えたい。人間の生成消滅を木の葉の生成消滅に比した名高い言葉を含む、グラウコスとディオメデスの間の対話の場面（6.119–236）がある。この対話場面の最後に強い印象を残す小さな話が加えられている。ゼウスはグラウコスの理性を奪い、牛百頭分の価値のある自分の黄金の盾と、牛九頭分の値打ちしかないディオメデスの青銅の盾との交換を申し出させた、と歌われている。二人の血が先祖の時代には深く結ばれていたという、ふたりの対話によって明らかになった驚嘆すべき事実の表現として一応の納得はいくが、やはりそれにしても奇妙すぎる印象がある。しかし武器交換が『イリアス』を貫く太い構造材であることを認めれば、この奇妙なエピソードの残す強力な印象も、構造材を支える前ぶれとして納得できる。

アキレウスが、盾の交換の果てに自分の古い盾の代替として新しい盾を手にすることは、『イリアス』がひとつの物語として狙い続けてきた達成だということになる。それでも盾に描かれた世界はアキレウスという『イリアス』の主人公の造形に関係がないと断言するべきなのだろうか。

4

本稿がここで試みることは、「アキレウスの盾の描写」がアキレウスという『イリアス』の主人公の造形に極めて深い関係を持っているにしても、その関連の全貌を明らかにすることではない。筆者の力量も与えられたページ数も、それを許してはくれない。ただそういう理解に向けて『イリアス』の、特に「アキレウスの盾の描写」に見られる一定の事実を指摘すること。これをここでは試みる。ここで筆者が本誌を中心に展開している『イリアス』読み直しの試み*15 のうち、本稿の議論に必要な点を繰り返すことを許してもらい

*14 第 4 章参照。

*15 安西眞（1）、『アキレウスの怒りについて』、『教養教育の再構築（日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト）第 2 回シンポジウム報告集』、東京、2005、56–68。
安西眞（2）、『κεῖνος（*Ilias* 9, 312）をめぐって』、『フィロロギカ——古典文献学のために』第 2 号、東京、2007、1–14。
安西眞（3）、『読むことの修練としての教養教育——古典（ホメロス『イリアス』の読み方）』、『教養教育

たい。もしこれまでの「アキレウスの盾の描写」理解が肝心の――と私は理解するのだが――アキレウス造形への貢献を見落としているとすれば、「盾の描写」を論じた者たちの視点の間違いだけが原因ではない。アキレウスという主人公が何者であり、アキレウスの怒りが何であるか、という『イリアス』理解の核心に関して我々はまだ真相とほど遠いところにいる事実にこそ大きな原因がある、と筆者が考えているから、というのが繰り返すことの理由である。我々がある程度納得できる「アキレウスの盾の描写」を持たないのは事実だ。筆者の一連の『イリアス』論は、一見その本題とは迂遠な論も含みながらも、アキレウスとは何者であり、彼の怒りは何であるのかを解明することを目指して進められてきた。本稿は、筆者が明らかにしてきた『イリアス』に関わる理解の線に従えば、盾の描写とアキレウスの間を関連づけるのにも有効な手だてが見つかるということを示そうとしている。

『イリアス』第9巻の「使者の段」について考えてみよう。Schadewaldt (1) はこの巻に関しても極めて説得的な解析を提示している。

アカイア軍の非勢に気を挫かれたアガメムノンは会議を開き、ネストルの勧告（9.89–113）に従って、謝罪の品々を約束した上でアキレウスの戦線復帰を乞う三人の使者を送る。使者たちは約束された償いを前提に次々とアキレウスの説得を試みる。オデュセウスは正使らしく堂々と演説し（9.225–306）、アキレウスの育ての親でもあるポイニクスは涙を流し、長いメレアグロス伝説を例話として使いながら、船が火に包まれてからの参戦では遅い、謝罪の品々が有効である今のうちに戦線に戻れと翻意を迫る（9.434–605）。アイアスは、それでも戦線に戻ることを承知しないアキレウスに腹を立てつつも、友の頼みは聞けと短く訴える（9.624–642）。アキレウスはそれぞれの口上に長短の返答をするが、結局のところ誰にも彼の峻拒の真意は不明のまま、使者の使命は失敗に終わる。アキレウスは味方の苦境を認めつつも戦場に戻ることは拒否するのだ。拒否がアカイア軍に与えた不快で不可解な衝撃は、使節の失敗を知ったディオメデスを怒らせる。償いを約束した使節など送らなければよかった、アキレウスを増長させただけだ、とまで彼は言う（9.697–709）。

ここにもネストルのそそのかし（上述参照）という物語の転回点へと向けた準備は見えると Schadewaldt (1) は指摘する。オデュセウスの演説に答えるアキレウスの大演説（9.308–429）にはアガメムノンとアカイア勢の復帰要請に対する峻拒の態度が直裁に表現

の再構築（日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト）第4回シンポジウム報告集』、東京、2008、5–20。

安西眞（4）、『言語と人間の社会集団――*Il.* 4,422–45 の理解をめぐって』、『フィロロギカ――古典文献学のために』第3号、東京、2008、48–65。

されている。その代表的な表現が、自分の運命と決意を語る部分である。母である女神テティスはトロイア戦争に参加した彼には死に至る二筋の道だけがあると予言した、と彼は語る。その道の一方を取れば激しくも短いトロイアでの活躍と不朽の名声が約束されているが、トロイアでの死が不可避であり、もう一方の道にはトロイアでの活躍も不朽の名声もないが故郷プティエでの永く平穏な生涯が約束されていると母は予言した（9.410–416）という。その予言に言及しつつ、アキレウスはオデュセウスの説得に対して答える。トロイアの攻略に自分の参加を期待するのは不可である、と。

この部分はアキレウスの内面を語る大事な部分でもあるが、同時にまた、自分は戦線に復帰するつもりはないばかりか、明日ヘレスポントスを我々の船団が渡るのを人は見るだろうと宣言する同じ演説の別の箇所（9.356–361）と呼応し、補い合って、アキレウスの戦線復帰拒否の厳しさを表現している。しかしこの激しい拒否の態度はポイニクス演説への返答（9.607–619）では大きく後退している。彼はポイニクスに使節団と別れて自分の陣屋に泊れと勧める。そして明日起きたら帰郷か否か相談しようと提案するのだ[*16]（9.617–619）。まだそれでも明日帰郷の船出をする可能性は残されている。しかしアイアスの演説への返答（9.644–655）では、帰郷の可能性は消滅している。彼はあい変わらず戦線に戻らないと言うが、次のような形でそれを表現するのだ。ミュルミドン勢の陣屋の群にヘクトルが迫る時までは、自分は戦場のことを考慮しないとアイアスに返答するのだ。ここでは帰郷という選択肢を忘れて返答をしている。

ネストルのそそのかし（第 11 巻）が、アキレウスを戦場復帰へと導く『イリアス』後半部のみせどころの要となる手管あるいは方便として機能しているとすれば、そのそそのかしそのものを可能にしているのがこの拒否後退の過程であると Schadewaldt (1) は指摘している。正しい指摘である。しかしそれでも大きな疑問は残っている。アキレウスは、アイアスを怒らせても仲間たちが次々と倒れて行く姿を目にしていても今は戦場に復帰しようとしないのだ。なぜなのか。

彼が拒否を後退させた経緯に我々は納得する。メレアグロスの例話が功を奏したと Schadewaldt (1) は主張する。それもあるだろう。しかしそれとともに、アキレウスを戦士の極北として描いている『イリアス』の叙述もこの後退を支えていると、考えるべきだ。戦士は結局不滅の名声を獲る唯一の場である戦場を離れることはできない。いや二筋の道（*διχθαδίας κῆρας φερέμεν θανάτοιο τέλοσδε* 9.411）をアキレウスが口にし、トロイアを去り

*16 相談の内容について：帰らないという選択肢を選んだ場合、それが明日だけに関わるのか、あるいは、帰るという選択肢を、期限を定めないで放棄するのか、ギリシア語本文の形だけからは決められないが（ちなみに B. Hainsworth, *The Iliad, A Commentary*, vol. 3 Cambridge 1993 はこのことに触れていない）、次に言及されるさらなる拒否の後退を考慮すれば、後者を読み取るのが妥当であろう。

故郷へ帰るという選択肢を選ぶと宣言する時、それがかりそめの事態であることを我々が理解するように『イリアス』はできているのだ。アキレウスが短く激しい命を終えることは『イリアス』の始まった時から回避できない結末である。第1巻にも9巻と同じくアキレウスの運命を語る神としてテティスが登場する。彼女はアカイア勢中に孤立したアキレウスと対話しまた彼の名誉の回復をゼウスに嘆願する。その双方でアキレウスは短命であると母は予言する（ὠκύμορος 1.417; ὠκυμορώτατος 1.505）。我々はアキレウスが故郷で永く平和な老後を過ごす筈のないことを知っているのだ。

ネストルのそそのかしが全体の転回点だという Schadewaldt (1) の指摘は正しい。しかしこの二筋の道の選択に関するアキレウスの宣言も、『イリアス』を構造付ける結節点であるといってもよいのではないか。『イリアス』は、ここでアキレウスが口にした決意が我々にはかりそめのものに聞こえるとしたら、そしておそらくは『イリアス』最後の詩人の聴衆にもそう聞こえたに違いないとすれば、かりそめの事態が持つ、本然へ戻ろうとする力、本然へ戻るに違いないと聞く者に感じさせる力を利用して組み立てられた物語だとも言えるだろうからだ。しかも本然のアキレウスの姿（18–24巻）は、実現されてみれば本然のものとして我々を説き伏せるだけの力を持つが、我々の予想をはるかに越えている。ネストルのそそのかしはこの本然のアキレウスが実現される過程を事情も知らずに手助けする行為に過ぎないとも言える*17。

ここで問題は、このかりそめの決意が物語の構造上重要な役割を果たしているとしても、かりそめの決意もまたアキレウスにとっての必然でなければならないということだ。使節の説得やアガメムノンの謝罪にもかかわらず、あくまで戦場復帰拒否を貫こうとするアキレウスの反応に、アイアスもディオメデスも怒るが、この怒りは二人の、拒否の態度の中に包含された真意への無理解を表している。しかし詩人にとって、また彼の描くアキレウスにとって、この拒否は必然でなければならない。彼の聴衆にも必然でなければならない。少なくとも、必然の事態であるとの説得力を持たねばならない（アリストテレス『詩学』第9章 1451a36–1452a11）。しかし彼の頑な拒否は「必然」なのか。もしそうであるならどんな必然なのか。Schadewaldt (1) のみならず、他のいかなるホメロス研究からも我々は納得できる説明を聞いたことがないように思える。もしアキレウスの戦場復帰拒否に必然・蓋然性があり、かつそれを我々は知らないのであれば、我々はまだアキレウスが何者なのか理解していないことになるのではないか。

*17 ネストルのそそのかしが未来の展開をどこまで読んでなされたものかは分からない。しかし、それがアカイア勢の為の策であることだけは間違いない。アキレウスが戦線に復帰するのはアカイア勢の為ではない。この後者の点は議論がありうるので、筆者の『イリアス』論はこの点を明らかにするまで終えることが出来ない。

5

アキレウスの盾の描く世界と『イリアス』の主人公としてのアキレウスとが無関係だという「常識」は、実はアキレウスが何者であるかをじゅうぶんに理解していないという我々の現状を反映している可能性がある、と筆者は疑っている。その疑いに顕著な表現を与えることができると思える例のひとつを使って、その疑いを記述することを試みてみた。以下、同じくアキレウスの戦場復帰拒否を中心に据えて、彼が何者として『イリアス』では描かれており、彼の怒りとは結局何であったのか、筆者の考えを簡略に記したい。筆者の『イリアス』諸論考を回顧再説することになるが了解を乞いたい。

A『イリアス』はけっしてギリシア対バルバロイ*18 というような二項対立を基礎としてはいない。アカイア勢とトロイアの関係は、同じ神々が支配する、同じ言語の上に成立している一続きの世界の中心と周縁との関係だと捉えた方が、『イリアス』の実情にはるかに近い。近代ヨーロッパ人の読み方は、歴史的な経緯に引き摺られ、誤った二項対立に依拠して来たと言える。『イリアス』の世界は時間の差異（古い層と新しい層）を軸に構想されている。けっして空間の差異（東と西、アジアとヨーロッパ）が軸になっているのではない。『イリアス』が社会的に極めて自覚的な叙事詩である*19 ということを考慮に入れれば、中心と周縁という主として空間的な表現は不十分であるかもしれないので、文明史的・社会史的に進んだ中心（アカイア勢）と遅れた周縁（トロイア方）が対立していると言った方が誤解を避けられるかもしれない*20。

B こういった根本的構想の中で、アカイア（中心）の英雄中の最強の戦士であるアキレ

*18 近代がその背後に含意してきたやや刺激的な言葉を使えばヨーロッパ対トルコ（＝アジア）という対立になる。この二つの概念の対立はホメロスには見られない、従ってほぼ同じことだが、ホメロスには「ギリシア人（一般）」というような汎概念がない。このことは、ヘシオドスには見られることと対比して古代から一部の注目を引いて来たことである（例えば、Hes. frg. 130 = Apollod. 244 F 200）。だから、我々の同時代の古典学者の間でも、ホメロスにはその対立がないことを強調する発言がないわけではない。例えば、E. Hall であり、J. de Romilly である（後者がそれを明言していることは、査読者のひとりの指摘によって知った。感謝する）。しかし、残念ながら、これらの明確な指摘は、今のところ『イリアス』の大きな再検討に結びついていない。ことは『イリアス』という叙事詩が前提にしている世界認識の根底に関わる。『イリアス』が前提にしている世界認識に対する理解が変更されれば、『イリアス』理解は大きく変わらざるを（進展せざるを）えないことは誰にも解ることであろう。ヨーロッパに於けるホメロス研究主流がホメロスを「ヨーロッパ対アジア」という対立とともに読んでいる事実の指摘と、そのことへの大きな疑問については和辻哲郎『ホメロス批判』（東京 1946）第 1 章を見よ。

*19 『イリアス』第 1 巻の両雄の激突が「社会的」な激突であることを明言するのは Reinhardt (42)。

*20 『イリアス』に古い英雄時代が描き込まれていることは、確かに Schadewaldt (1), 39 にも言及がある。しかし、彼は古い層、新しい層という考え方は分析論につながると警戒したのか、その洞察を発展させなかった。文明史的な意味での中心（アカイア）と周縁（トロイア）という対立については、安西（4）、64–5 参照のこと。

ウスだけが、取り残された「島」の位置にある[*21]。彼だけが「古風」な英雄としての態度・思想を表明している。これが『イリアス』の構造を作り出している。そのことを示す『イリアス』本文を2例あげる。

a *οὐ γὰρ ἐγὼ Τρώων ἕνεκ' ἤλυθον αἰχμητάων*
δεῦρο μαχησόμενος, ἐπεὶ οὔ τί μοι αἴτιοί εἰσιν·
οὐ γὰρ πώ ποτ' ἐμὰς βοῦς ἤλασαν οὐδὲ μὲν ἵππους,
οὐδέ ποτ' ἐν Φθίῃ ἐριβώλακι βωτιανείρῃ
καρπὸν ἐδηλήσαντ', ἐπεὶ ἦ μάλα πολλὰ μεταξὺ
οὔρεά τε σκιόεντα θάλασσά τε ἠχήεσσα· (1.152–7)[*22]

アキレウスがアガメムノンに向かって「自分にトロイア方と戦う理由はない」と主張している場面である。戦争の二つの形が対比されている。近隣者間でのあらそいとでも言うべき戦争が一方であり、もう一方には、海山を越え遠征して行う戦争がある。拡大して言えば、近隣の部族同士の争いと国家間のいわゆる戦争である。アカイア勢はギリシア人なのだから一体だという思い込みとともに、アキレウスの言葉を聞けば、「トロイア人との戦をする理由は自分にはない」という彼の主張は、腹立ちまぎれの埒もない言い草としか聞こえないかも知れない。しかし一人の人間が、他者に自分の行動基盤を正面から説明している言葉だと思って読めば、アキレウスは、アカイア軍が現在行っている戦争は自分が参加しうる範疇に入っていないと断定している[*23]、とは聞こえないだろうか。アキレウス＝近隣戦争という自己同定は「アキレウスの盾の描写」の理解にも直接影響してくる。

b *οὐ μέν σοί ποτε ἶσον ἔχω γέρας, ὁππότ' Ἀχαιοὶ*
Τρώων ἐκπέρσωσ' εὖ ναιόμενον πτολίεθρον·
ἀλλὰ τὸ μὲν πλεῖον πολυάϊκος πολέμοιο
χεῖρες ἐμαὶ διέπουσ'· ἀτὰρ ἤν ποτε δασμὸς ἵκηται,
σοὶ τὸ γέρας πολὺ μεῖζον, ἐγὼ δ' ὀλίγον τε φίλον τε

*21 英雄という概念あるいは行動原理をめぐって、アカイア勢は一様ではなく、アキレウスが唯一古い層の英雄を表現し、そのことによって孤立しているという指摘については、安西（1）、60–63を参照。

*22 安西（1）で論じた。

*23 『イリアス』最後の詩人の聴衆にそれが理解できたか。その詩人の聴衆ではない身にとっては断言しかねる。しかし、当時社会の形は急激に変わりつつあったこと（後述のヘシオドスの「鉄の時代」参照）、従って聴衆は軍事的な面での急激な変化をも、身をもって体験しつつあったこと、また、軍の原理について『イリアス』1–4巻で繰り返し歌われること（安西（1）、62および安西（4）、62–5参照）、これらを考えれば、漠然と最初は受け入れ、後で何かのヒントになる部分（例えば第9巻）を聞いて合点がいった、という理解は可能だったと信じたい。

ἔρχομ' ἔχων ἐπὶ νῆας, ἐπεί κε κάμω πολεμίζων.　(1.163–168)

このアキレウスの抗議も、集団行為よって獲得した利益の分配に関して人間の間では常に発生しうる不満の言葉に過ぎないと読んで済ますこともできる。しかし人間が集団を構成する際の原理に関して、アカイア勢とアガメムノンが現に依拠している原理と、自分に固有の原理との間にある違和感にアキレウスが形を与えようとしている部分だと読むことも十分可能ではないだろうか。

両雄の言い争いの場でのアキレウスの二つの発言が、『イリアス』理解の決定的な鍵となるものを含んでいると捉えられたことは、筆者の知る限り、これまでほとんどなかったと言える。アカイア軍の一体性が当然の前提として近代の読み手を支配してきたと言える。平たく言えば両雄の激突はあくまで仲間の中でのけんかとして理解されて来たのである。しかし「ヘラス」成立以降の統一ギリシアという概念を前提にした『イリアス』理解に疑いを持ち始めれば、『イリアス』は同じく対立的であるにしても、漠然と前提されて来た種類の対立とは別種の対立を描いていると見えてくる。その別種の対立とは、人間の社会を成立させる原理をめぐる対立であり、古い社会構成原理とそれを破壊しながら登場しつつある新しい原理との対立である、と見えてくる。その対立の中で詩人はアキレウスをアカイア勢の中で唯一古い英雄概念、従って古い社会構成原理を体現している「島」として描いていると読めて来る。この間の事情を明らかにしていこうというのが筆者の諸『イリアス』論の目指しているところである。

アキレウスの位置を側面から明らかにするもうひとつの発言を引用する。トロイア方援軍のリュキア人の長サルペドンの名高い発言はアキレウスの論理（b）とほぼ重なり合う。また古層の英雄はアカイア勢では「島」だが、トロイア方という周縁世界では「全体」であることも同時に示している。

c *Γλαῦκε, τίη δὴ νῶϊ τετιμήμεσθα μάλιστα*
ἕδρῃ τε κρέασίν τε ἰδὲ πλείοις δεπάεσσιν
ἐν Λυκίῃ, πάντες δὲ θεοὺς ὥς εἰσορόωσι,
καὶ τέμενος νεμόμεσθα μέγα Ξάνθοιο παρ' ὄχθας,
καλὸν φυταλιῆς καὶ ἀρούρης πυροφόροιο;
τὼ νῦν χρὴ Λυκίοισι μέτα πρώτοισιν ἐόντας
ἑστάμεν ἠδὲ μάχης καυστείρης ἀντιβολῆσαι, ...　(12.310–316)

ここでのサルペドンと、b でのアキレウスは、社会的行為の評価と利益の分配に関する同一の原理を主張している。共同行為では貢献に応じて果実を配分するという原理だ。サ

ルペドンの発言が「実現せねば」と言っているのに対して、アキレウスは「君たちの間にはその原理が否定されている」と非難しているという違いはある。しかし原理は明らかに同一である。この稿の目指すところを考慮に入れて、もう一点指摘したい。二つの主張には、特に「実現せねば」の形によるサルペドンの発言には、ある理想化の傾向が明確に見えるということである。彼の主張する利益の分配原則は、少なくとも人間の大規模な集団では誰の目から見ても実現不可能に見えるほどに理想化されている。

A. Parry の指摘のとおり[*24]、サルペドンの発言は英雄社会の原理[*25]（ただし理想化された）に他ならない。二人の「典型的」な英雄[*26]の発言の底にあるのが、理想化された英雄社会の原理であるとすれば、アキレウスに非難されるアガメムノンとアカイア勢は「理想化」を詩人に強いる「現実」を[*27]その限りでは意味している。詩人によるこの理想化は作用する向きは違うが、ホメロスの同時代人[*28]、五時代の説話のヘシオドスと全く同じものを宿しているというべきだろう。違うのは、ヘシオドスは英雄時代の後にやってきた「鉄の時代」に生きる絶望と不安を歌い、時代の先に待つ黙示録的な世界を描くが、『イリアス』の詩人は失われつつある英雄時代に、理想化という形で関わる点だ。

6

「使節の段」に戻ろう。アキレウスは総大将の謝罪と償いを峻拒する。ポイニクスの、まだアカイア勢からの褒美が可能な時点で折れろという勧めも断る。英雄類型の上では比較的アキレウスに近いと一般的には評価されているアイアスやディオメデスを激怒させてもアキレウスは、アカイアの全軍からの戦場に復帰せよとの願いに拒否を与える。その理由はまだ我々には未知である[*29]ことをまず指摘した。筆者が提示を試みようとしている、

---

*24 A. Parry, *The Language of Achilles*, *TAPA*, 87. 1–7（現在は同名の論文集、Oxford, 1989, 1–7），6。ただし、彼はアキレウス以外のすべての英雄たちが英雄の行動原理と価値体系を共有していて、アキレウスだけがこの規格からはずれる、と誤解している。

*25 ただし、『イリアス』最後の詩人はその原理をほぼ常に社会の創出する富や社会的栄誉の分配という形で表現する。

*26 筆者は、A. Parry と違って、この 2 人は英雄類型としては同じ典型的として造形し、他のアカイアの「英雄」たちは、典型からはずれる、近代化した、崩れた英雄として造形していると読む。ただし、この理解は世界のホメロス読みの中でアカイア勢の中のアキレウスのように孤立している。

*27 彼らを後期英雄社会の英雄と呼ぶべきか、思い切って「鉄の時代」の英雄という矛盾した用語を使うべきか、筆者にはまだ決断がついていない。

*28 古代の噂話で信じる根拠はない、と言われればそれまでではあるが。

*29 アキレウスの峻拒の真相については、M. Edwards, *Homer, poet of the Iliad*, Baltimore and London 1987, 231–237 がこれまでの「解答案」を手際よくまとめている。彼の総括は、こういう問題については、時代と個人に応じて「解答案」があっていいのだ、ということに尽きるであろう。つまり、これまでに、彼が賛同を呈していいと思えるような答は出されたことがない、と彼は言っている。最後の点については筆者も賛同する。時代と個人で違っていいという見解には全面的には賛同しかねる。

その未知を救うべき理解に、上に示したのとはいくらか違う方向から表現を与えるとすれば次のようになるだろうか。すなわち、アイアスもディオメデスも峻拒にただ怒る他ないほどに、とうてい峻拒の真意を理解できないほどに大きな溝がアキレウスとアカイア勢の間に生じていることを示すことも「使者の段」の物語上の機能であったかもしれない、という形で上にあげた筆者の読み方をまとめることもできる。その「溝」とは戦士とは何者であり、人間の社会はどのように構成されるべきか、という思想に関わる溝である。この溝に形を与えること、これが怒りに満ちた物別れとも名付けるべき「使者の段」の詩的機能なのではないか。

筆者は、自分で出そうとしている答に、ある部分では、もちろん満足を感じてはいるが、疑問がないわけではない。今まで9年間一緒に戦って来てこの時期に決定的な物別れが常識的にありうるか、という問題は別に置くとしても、それでもひとつ疑問があり得る。人はこのような思想的な不協和音を理由に、仲間と生死をともにして戦って来た戦争を見捨てることができるのか。目の前で多くの仲間が死んで行くのを、自分の原理にもとづいた選択の結果として甘受できるのか。そのような選択をアキレウスがし、かつ実行するということに作品としての迫真力や説得力を認めることができるだろうか。

少なくとも詩の世界では、一定の条件が満たされれば、『イリアス』最後の詩人がここで描いている対立的光景は可能である、と筆者は考えたい。その条件とは、詩人が、アキレウスやサルペドンに語らせた、英雄社会の原理が、「理想化されすぎた」という留保つきでも、人間社会の原理として迫真力を持っていること。それが失われつつあるという危機感が詩人と聴衆に共有されていること。その原理を破壊しながら登場した新しい社会の原理（鉄の時代の原理）に対する不安と絶望が共有されていること（理想化の根拠）。これが条件である。これがあれば、アキレウスによる、アガメムノンやアカイアの仲間に対する戦場復帰拒否宣言は、聴衆の間にひとつの思想の表明として大きな共感を獲得できた筈だと筆者は信じる。詩人が『イリアス』の最終形を与えた時代には、英雄時代の原理と鉄の時代の原理の対立は巨大な二項対立としての迫真力を持っていたと筆者は信じる。アキレウスの戦場復帰拒否を、ネストルの与える転回点への出発点とだけ片付けようとすれば『イリアス』は優れた物語が持つべき「必然」を失ってしまうのではないか。

7

本題に関する指摘に比べれば長過ぎる前置きではあったが本題に戻ろう。結論を先に言っておく。何人かの研究者が既に気づいていたようにアキレウスの盾の描写はひとつの世界を閉じ込めている。その世界とは詩人が思い描くところの英雄時代像に他ならない。人はこの盾と『イリアス』の主人公であるアキレウスの関係を説明することに窮していた

訳だが、それはこの盾の描写が意味するものを見誤っていたからではない。アキレウスという主人公が体現している英雄および英雄時代というものが、この叙事詩の中で占めている正確な場所を理解できていなかっただけである。詩人は、英雄時代、英雄叙事詩がそこで育ち時代の表現ともなったある社会の根本的な形が、不安を感じさせる程に変容しつつある場所に聴衆と共に立って、ギリシア人が失いつつあるひとつの時代精神に表現を与えようとしているのだ。万感の哀惜の念をこめてであることは間違いない。ギリシアの英雄時代の最後の英雄に、その英雄による、「盟友」の仇を討つという、いかにも英雄にふさわしい戦闘の為に、少し古めかしい匂いのする「ほんもの」の英雄時代を閉じ込めた盾を、詩人は贈ったのだ。これが、アキレウスの盾の描写の持つ、『イリアス』の世界そのものを決定づけるほどに重要な詩的「意味」である。

以上のような結論に直接あるいは間接に関係する観察を指摘する。

［盾の全体について］：円形の盾の中心には大地と天が描かれている。この天の中心に置かれた太陽と月（484）を指して、聞く者に時間を意識させるものだ、と Schadewaldt (2) は指摘している*30。彼が言うとおりで、北極を中心にけっして水平線の下には隠れないで一年まわり続ける Ἄρκτος への突出した長さの言及（18.487–489）も、聞く者の意識を時間、あるいは年月へと向ける手段のひとつと見ることが出来る。さらには、盾の外周を流れる形で描かれたオケアノスの流れも、同じ喚起力を持っている。この世界を停止することなく進み続ける川の流れに譬えたヘラクレイトスの言葉（Pl. *Cra.* 402a）を思い起こせばよい。

廻り続け、流れ続けるものを中心や枠に置いて、時間あるいは年月を感じさせるという意図は、盾に描かれた人間の社会の描写にも貫かれているように思える。盾の人間社会の営みの描写は結婚式の様子から始まる。男と女が結ばれるということは、時代や社会や社会を作り出す極めて重要な人間社会のできごとであるから、時代を閉じ込めた盾の描写が結婚式の光景から始まるのは不思議なことではない。人間の五つの時代を語ったヘシオドスも、銀の時代には、「ひと」は母親の近辺に頑是無い子供として百年とどまると歌っているし（*Op.* 130–131）、鉄の時代の終わり αἰδώς（廉恥）が人間の世界から去って、社会が崩壊する予兆として、母親が顳顬の白い子供を産む時（*Op.* 180–181）、つまり婚姻から正常な次世代が生まれ育つということが行われなくなった時だと歌っている*31。詩人がアキレウスの盾に人間の社会や時代を閉じ込めた、ということを感じさせる理由としては、ひとつには、このように盾の図柄の人間の部（490–606）が婚姻の情景を描くことから始める

*30 Schadewaldt (2), 364.

*31 母が顳顬の白いこどもを産むということの絵解きについては、安西（1）、63–64 を参照。

ことによって親子関係の開始、つまり世代の開始を感じさせるから、ということがあるだろう。しかし、婚姻の情景で始まるという事実の意味はそれだけではないように思える。

人間の社会の描写の終わりは祝祭を叙述している（590–606）。農の祝祭的記述が 3 景続いた後[*32] であるから、純粋な祝祭の記述が来ることはある意味では自然である。しかしそれが「農」の世界の祝祭だとは詩人は歌っていない。これは意図的にそうしていると筆者には思える。その答はこの段落の最後にしるす。さらにここでは、祝祭全体を描いているというよりは、祝祭の中心的行事である円舞の様が歌われている。それも、それを踊る独身（ἠΐθεοι καὶ παρθένοι 18.593）の男女の振る舞いや様子の記述に終始していると言ってよい。しかも、その独身の女性には ἀλφεσίβοιαι（嫁資を稼ぐ、嫁資は婿の側が支払うものと想定される）という、epitheton ornans かどうか疑わしい[*33] 形容詞が付される。祝祭が描かれているというより、独身の男女のそれぞれ婿選び嫁選びの場としての祝祭が描かれていると言った方が正確であろう。男女は盛装で踊りにのぞんでおり（595–598）、互いに手を取り合って踊るのだ。加えて詩人はこの情景を歌いながらしきりに聴衆に回転を意識させる。彼らの円舞は陶器作りが回転台を廻すようであり（600–601）、円舞を取り「囲んで」見物の衆は立っているのであり（604）、円舞の中心では 2 人の軽業師が踊りのリズムを支配しながら渦巻き運動を続ける（ἐδίνευον 606）。ここで人間の社会の描写は終わるが、最後にオケアノスがおそらく円形をイメージする形でその人間たちの世界を取り囲んでいると歌われる。多分、誰もが想像するように、盾は円形なのである[*34]。その詩人は描写の最後のところで、盾に描かれた世界を廻せと命じているのだ。すると、絵の群れは循環し円舞の中で手をつなぎ合った独身の男と女は、もとの人間たちの社会を映す絵の群れの最初にもどって、結婚式をポリスの中で行っている男女へと続く。多分、この円舞の場所をポリスだとも「農」の場の近くだとも、もちろん「牧」の場だとも詩人が言っていないのは、この円舞を移行可能なものたらしめる為なのだ。Schadewaldt (2) は、円舞の情景と冒頭の結婚式の情景が続くことを既に指摘しているが[*35]、どのようにして連続性が確保されているのか、ここではいくらか言葉を付け足して説明した。こうして世代は繰り返され、時代は作られるのだ。

盾の描写全体に関してもうひとこと指摘を加えたい。Reinhardt は、この盾の描写と「ヘラクレスの盾の描写」を比較して、例えば、後者には見える戦車競争の絵がアキレウスの

---

*32 正確には、やや闘争的な情景も含む「牧」の世界（18.573–589）が、おそらく対比による律動を意図してはさまれる。

*33 『イリアス』、『オデュセイア』にはここだけで使われている。*h.Ven.* 119 にも同じ使用例が見られるが、ここからの学習である可能性がある。

*34 Schadewaldt (2), 357–358.

*35 Schadewaldt (2), 367.

盾の描写にはないと指摘している*36。彼の主張によれば、その理由は、『イリアス』では戦車競争が第23巻で歌われることになっているからだという。だからここでは図柄として選ばれていないのだ、と。この盾の描写と、盾の描写以外の『イリアス』との互いに補うような関係こそが、『イリアス』がひとつの作品であり、ひとりの詩人の手になるものだということを証拠立てているのだ、と彼は主張している。しかし彼の指摘は盾の描写を置いた詩人の意図から若干隔たっているように思える。

盾に描かれたものとして詩人が報告をしているのは、基本的に人間の営為、それも社会を培うような基礎的な営為だけである。筆者が「農」とか、「牧」とかというような特殊な表現を使って盾に描かれた情景を分類してきたのはそういう理由からだ。これら二つの他には、筆者の分類では「ポリス」がある。この三つの世界が描かれていると言ってよい。またこれらの他に水準が全く異なる普遍的営為として「婚」がある、とも言えなくはない。戦車競争はこれらの範疇に入らない。だからアキレウスの盾にはないのだ。そして盾の時代性（古層性）は、「ポリス」と「農」に集中して意味されている。その点を見ていこう。

［二つのポリス］：「婚」を除けば、裁き（497–508）と戦（509–540）の情景が描かれている。

［裁き］：殺人があり、殺した人間の側の氏族は、賠償金を支払ったと主張し、一方殺された者の側では受け取っていないとして、争いが生じている。これが裁きである。形は双方が懸賞金を置いて、すぐれた調停案を提示したものに2タラントン*37の金が与えられるというものだ*38。

まず、この裁きは、アゴラで行われているのであって、常設裁判所への言及はない。一方、この詩人とほぼ同時代と推定されているヘシオドスでは、*βασιλῆες*と呼ばれる、「賄賂を取る」裁き手がいる*39。ヘシオドスの時代には、常設裁判所と多少とも職業的な裁判官がいたのだ*40。盾の中のポリスの*ἴστωρ*（18.501）は、この語に含まれる「知る（*οἶδα*）」が「法を知る」を響かせているとすれば、多少とも職業的な裁判官を意味し得る。しかし裁

*36 Reinhardt, 408–409.

*37 2という数字の意味は、もちろん、争う双方が1タラントンづつ、という意味である。

*38 この懸賞金が、後にアテナイで行われた調停裁判人（*διαιτηταί*）による裁きの際の金銭（*παράστασις*）に似ていることから、そのアテナイの裁判制度と比較しながらこの裁きを見ていこうとする研究がある。H. Hommel, *Die Gerichtsszene auf dem Schild des Achilleus*, *Palingenesia* 4 (1969) 11–38. いうまでもなく、本稿の目的とは全く異なる。

*39 *Op.* 38–9その他。

*40 *βασιλῆες*は多少とも持続的な社会的地位を、*ἴστωρ*よりも遥かに色濃く表現するから、古典期には人間の地位を表す語彙となり得た、と理解できる。「賄賂を取る」（*βασιλῆς … δωροφάγοι Op.* 263–264）は、持続的な「地位」と切り離せない。

きを取り囲む人々が双方のどちらかに肩入れをした発言を次々にし、聖なる輪の形に座した長老たちがその怒号の中で、裁きの行方に関わる発言をし、その長老たちの中で最も適当な裁きを提案した者に賞金が与えられるというのがこの裁きの形なのだ。この語が使われているホメロス叙事詩中のもう 1 カ所（賭けの証人、23.486）同様、対立する二つの利益の中で公平にものごとの行事をする「もの知りの」第三者という程度の意味であろう。少なくとも、多少とも職業的な裁判官に与えられるはずの、裁きを支配する力はここの ἴστωρ の叙述には見えない。それにこの ἴστωρ を常設裁判所につながる多少とも職業的な裁き手と理解することは、明らかに紛争の当事者が提供したと聞こえる 2 タラントンの黄金という裁判の根底形態と矛盾する。アテナイの調停裁判や、現代の民事裁判に見られる供託という手続きに直結して考えるのはいかにも論理の飛躍である、と筆者には見える。

盾の中のポリスに置かれたこの裁きの場面は、氏族間の自立的な調停能力の上に裁きというものが成立しているらしく描かれていると、読むべきだろう。自立と言うと誤解を招くだろう。むしろ、ここでは長老たちがおそらく代表している氏族的な権力より大きな権力組織は、このポリスにはまだ存在していないらしく見えると言ったほうが正確であろう。

プティエーを支配する強大な氏族の長であるアキレウスに対して、ミュケーナイの長であるアガメムノンが「俺の方がおまえより上位だということを明かすためにおまえのブリセイスを奪い取る（1.184–187）」と宣言してアキレウスの「社会的貢献」を証明する分配品（γέρας）、すなわちブリセイスを奪う。これが第 1 巻の描く両雄対立の根本のところにある、ある種の権力構造上の混乱状況である。

ところが、この裁きの情景には、氏族より上位の公的な力はまだ表れていないらしく見えるのだ。もし、氏族社会の指導者であるアキレウスよりアガメムノンを上位に置く何かの「制度」の存在を第 1 巻が示唆しているとすれば、盾の中の裁きの情景には、ポリスが既にあり、しかもそのような氏族権力より上位の権力がまだ存在していない「時点」が表されていると読むことができる。これをアキレウスの世界の原点と名付けることは行き過ぎであろうか。

［戦い］：ここで描かれているのは、明らかにアキレウスが自分に属するものだと言った近隣戦争である。Reinhardt は、ポリスを出た襲撃隊に襲われる羊飼いと羊の群を指して、ポリス包囲側が運んで来た、糧食自給の為の畜群だと言っている*41。とうていそのようには読めない。包囲する者たちは陣屋を構えているわけではない。「ポリスを囲んで座り込

*41 Reinhardt, 403. もし彼の言うとおりであれば、ここで描かれているのは多かれ少なかれ組織的かつ長期にわたる「戦争」だということになるだろう。

んだ」と言われている（509–510）。囲まれた者たちは、敵の裏をかいてポリスを出るが、出て待ち伏せ攻撃をする為に停止するまでに宿泊があったとは歌われていない。明らかにその日のうちに着いたのだ。しかも敵に知られずにポリスを出るのに馬や戦車を使うことは出来ないから、徒歩で出たのだ。ポリスを囲む者たちも、その日のうちに自分たちの領地を出て、そのポリスに着いたと考えてよい。羊が襲われたと知ったポリス包囲側は馬で駆けつける。もちろん、急いでいる為だ。馬は運搬の為、またこういう急な用のために連れて来てはいるが、ポリス側と包囲側の領地は互いに徒歩圏にあると想定すべきだ。ポリス側の襲撃隊は、こうして徒歩圏内にある、包囲者側の領地内で包囲者側の財産である羊の群に襲いかかり、ポリス包囲者たちをポリスから離して野戦を試みたのだ。こういう戦がここでは描かれている。

古いギリシア社会の行動様式が、アカイア勢の中ではアキレウスに集約的に託されていることに Schadewaldt (1) は気付いていない。しかし『イリアス』に古い社会と新しい社会が混在していることには気付いていた*42。その古さのひとつの表れが、ネストル*43 の語る、自分の若い頃経験した戦争である（e.g. 11.670–761）。また、第 9 巻でポイニクスがアキレウスを説得する為に例話として語るメレアグロスの戦いの話である（9.524–599）*44。アキレウスの心の中にある「自分の戦争」*45 がこの種の戦争であることは既に引用とともに指摘した。

ポリス側の襲撃隊が進軍する様子が非常に興味深い。彼らをアテネとアレスが率いたとある。しかも美しく大きな神々の姿のままで（*καλὼ καὶ μεγάλω σὺν τεύχεσιν, ὥς τε θεώ περ / ἀμφὶς ἀριζήλω*· 18.518–519）。そして人間たちは、彼らの足下に矮小な姿を見せていた（*λαοὶ δ' ὑπολίζονες ἦσαν*. 519）。そういう対照を想像せよと詩人は我々に命じている。笛を吹きながら登場する羊飼いとその羊の群から（525–526）始まる戦闘場面も稚拙で非「近代的」であるが、この戦いの記述全体が懐かしく古めかしい感じを与えるのは、神々と戦士たちのこの対照的な大きさのままの共存の風景による。図像を語る詩人の意図は鮮明である。

---

*42 注 17 参照。その他、例えば、アキレウスの、飢餓状態での決戦決意（19.305–308）には、極めて古いギリシアの宗教的な習慣が表れている、と指摘している。アキレウスと「古さ」が結合している例も知っていたのだ。

*43 ネストルは、『イリアス』のあらゆる箇所で、オデュセウスとともに、アカイア勢の「近代戦」を指導する。アキレウスが古い英雄時代の戦争を象徴したまま変化しなったと見えるのと対照的である。ネストルは青年時代の英雄時代的戦争と物語の現在での「近代戦」を一身に表現して、アキレウスという存在を照らし出す定規の役割を果たしている、ともいいうる。

*44 メレアグロスの住むポリスを攻めた「クーレーテス（*Κουρῆτες*）」という集団の住地はプレウロン、メレアグロスの住むカリュドンから西へ 10 マイル、のポリスである。cf. Hainsworth, ad 9.529.

*45 5 章—B 参照のこと。

『イリアス』でも『オデュセイア』でも神々は人間の前に姿を現す時、人間の誰かに姿を変えて登場する。神々の間で何かがなされている時にはその巨大な姿を隠しはしないが。詩人はここでは神々と人間が本来の姿のままで交流する光景を描き出しているのだ。ギリシアの神話に限らず、世界のあらゆる原始宗教、神話において、人間と神々は世界の始まりにおいていっしょに暮らしていた。ヘシオドスも人間と神々は最初同じところから発生したといっている（*Op.* 108）。

しかし、戦闘場面で描かれる人間たちは英雄時代の装備をまとっている。であれば、英雄時代をとび越えて黄金時代を心に描け、と詩人は命じているのではない。古色を帯びた英雄時代を聴衆に想像させようとしているのだ。神々と戦士たちを同居させる詩人の意図は、近隣戦争を選んだ意図と同じだ。英雄時代の戦争でも古い方のあらそいを感じ取れ、と命令しているのだ。

［農］：（麦の）種まき、麦の収穫、葡萄の収穫。この季節順に並んだ*46 三つの「農」の場面に共通する、鍵となる言葉は「理想化」である。それも、労働の理想化である。また、アキレウスの外見上の同類を、盾の描写の範囲内で探せと言われれば、ポリスの情景のうちの、戦いの光景の中（509–540）に求める他ないが、そのアキレウスが表現する英雄時代の根本的思想は、この連続する三つの「農」の光景に託されているといってよい。

労働の理想化は辛い労働の描写と、それに付与される祝祭的な光景の組み合わせで表現される。つぎの様な種まきのための耕作の描写がその典型である。

οἳ δ' ὁπότε στρέψαντες ἱκοίατο τέλσον ἀρούρης,
τοῖσι δ' ἔπειτ' ἐν χερσὶ δέπας μελιηδέος οἴνου
δόσκεν ἀνὴρ ἐπιών· τοὶ δὲ στρέψασκον ἀν' ὄγμους,
ἱέμενοι νειοῖο βαθείης τέλσον ἱκέσθαι.
ἣ δὲ μελαίνετ' ὄπισθεν, ἀρηρομένῃ δὲ ἐῴκει,
χρυσείη περ ἐοῦσα· τὸ δὴ περὶ θαῦμα τέτυκτο.　(18.544–549)

ここには、長く辛い労働と、疲労の切れ目切れ目に、畝の端でふるまわれる一杯の葡萄酒が耕作者たちに次の一区切りまでの気力を与える様と、グラスを手渡す者と耕作者たちとの協同の様とが描かれている。労働は辛いが歓びを与えもする。その歓びは、端的には一杯の葡萄酒の形で表されているが、かれらの労働のお蔭で、そもそも金で刻まれたものであるはずなのに、黒々とした肥沃な畑地に魔術（*θαῦμα τέτυκτο*）のように変えられてい

*46 この一年の中の順序に従った配列が、盾の描写が時間、時代へと我々の思考を導く意図に基づくことは明らかである。［盾の全体について］の指摘を参照のこと。

く大地も、労働に堪える農夫たちの歓びを表している。

もちろん、黄金を肥沃な黒い大地に変えるのは、美術作品としての盾という側面から見ればヘパイストスの技であり、『イリアス』という叙事詩の一節であるという側面からいえば、それを言葉で伝える詩人の「詩」でもありうる*47。しかし同時に、黄金で被われた盾の表面に描かれるところの農夫が、営々と耕し続ける大地が、農夫の後ろで耕されたばかりの黒々とした農地に見える、という魔術的な表現は、むしろ英雄時代を支えた「農」の思想への詩人の深い共感と、「農」の営みに対する神々からの祝福の表現でもあるのではなかろうか。

盾の描写の頂点である三つの「農」における祝祭的労働の描写について二点指摘しておくことがある。

失われようとするものを共感とともに理想化する傾向は、この「最後の詩人」の思想的特徴であり、詩的な特質であるということが第一点。このことを理解するためには、アガメムノンと争い、怒り、孤立したアキレウスの否定的な主張（「私は君たちを認めない」）を、社会を構成すべき原理としての思想の言葉に変えた、サルペドンの演説を思い出せばよい。この二つを見比べることによって我々はこの詩人の持つ、後ろ向きの理想化という傾向を確認することができるだろう。サルペドンの演説が英雄時代を支えた行動規範に対する戦士の側からの理想化であるとすれば、盾の三つの「農」の場面はもっと広くアキレウスやサルペドンたちの社会を底から支えた「農」の思想の理想化であり、その思想への共感でもある。

第二点の指摘の為に、再びヘシオドスの「五時代の説話」を引き合いに出したい。ヘシオドスは「鉄の時代」の労働（もちろん「農」の労働である）を次のように嘆いて次のように歌い始める。

νῦν γὰρ δὴ γένος ἐστὶ σιδήρεον· οὐδέ ποτ' ἦμαρ
παύσονται καμάτου καὶ ὀιζύος οὐδέ τι νύκτωρ
τειρόμενοι· χαλεπὰς δὲ θεοὶ δώσουσι μερίμνας. (*Op.* 176–178)

自分が生きる時代を「鉄の時代」と詩人が名付けているように、この時代は鉄という材料の獲得を契機とする農業技術の飛躍的進展の時代であり、武器の高度化の時代である。またおそらくは社会に浸透し始めた文字使用による統治の強化とともに氏族社会のまだそ

*47 盾の描写の先行するヘパイストスの作業の意味と、盾の描写の中に現れる見物人、そして盾の描写そのものに割り込んでいるヘパイストスへの明示的な言及と、創作者らしい影とに注目するように我々を導き、盾の描写と盾の製造の描写を一体化して、ひとつの創作論をここに見ようとするのは Marg である。確かにひとつの説得力を認めねばなるまい。

の上に成立する公的な権力の増大（正義は武力の中に存在するようになる：192–194）が起こる時代である。そしてこの時代について詩人が描く不安と絶望に満ちた絵は、その中で相対的な社会的地位の低下を蒙った農民の苦しい呻きである。この嘆くべき現状がヘシオドスに英雄時代を、低落一方の傾向にある人間の世界を一時的に押し戻した時代である英雄時代を、人類の歴史の中の第四の時代として立てさせた動機とも言える。

ヘシオドスは『イリアス』最後の詩人と違って、英雄時代を理想化したり、その喪失を嘆いたりすることに力を向けなかった。しかし「鉄の時代」への絶望の歌に「英雄時代」と彼が名付ける時代に対する渇望・憧憬が見えない訳ではない。

οὐδὲ πατὴρ παίδεσσιν ὁμοίιος οὐδέ τι παῖδες
οὐδὲ ξεῖνος ξεινοδόκῳ καὶ ἑταῖρος ἑταίρῳ,
οὐδὲ κασίγνητος φίλος ἔσσεται, ὡς τὸ πάρος περ.　(182–184)

ここでは「鉄の時代」が失いつつある人間の社会的なふるまいの中での徳目が数えられている。その徳目とは、まさに『イリアス』がその古層の英雄たちに実現させた徳目である。アキレウスは、盟友（*ἑταῖρος*）であるパトロクロスの仇を討つ為に、短い命を燃焼させる。ヘクトルは父プリアモスと、我が子と、心にかかる妻アンドロマケの為に、明日は死ぬと覚悟を決めて、たった一度だけ彼らに会いにポリスに戻る（第 6 巻）。この場面が与える感動は Schadewaldt (2) が活写する*48。そういう徳目が今は失われつつある。人間はかつてのようではない（*ὡς τὸ πάρος περ*）。ヘシオドスと彼の聴衆にとっての「かつて」（*τὸ πάρος*）とは、同時に『イリアス』の原型となった、戦士を描く叙事詩という文芸形式を必要とし、生み出した時代でもあったことを筆者は疑わない。ヘシオドスの「鉄の時代」に対する絶望と、『イリアス』に見られる、アキレウスが、サルペドンが、ヘクトルが具現する英雄時代の理想化は、思いが向けられる方向こそ正反対だが、根っこに抱えているものは同じである。その根っことは、ヘシオドスと彼の聴衆、『イリアス』最後の詩人と彼の聴衆が共有した、いわゆる「鉄の時代」に対する絶望と不安だった*49。

最後に、冒頭の状況証拠に戻ろう。ウェルギリウスは『イリアス』の盾の描写から何を学習したか。主人公たる英雄の唯一の戦闘の前に盾の描写を置くということだけを学んだのかという疑問である。「否」が本稿の提出する答である。ローマのかの詩人は、叙事詩

*48 Schadewaldt (2), 207–233.

*49 *μηκέτ' ἔπειτ' ὤφελλον ἐγὼ πέμπτοισι μετεῖναι / ἀνδράσιν, ἀλλ' ἢ πρόσθε θανεῖν ἢ ἔπειτα γενέσθαι.* (*Op.* 174–175) という嘆きは、「ここ以外の場所」を求めるという意味で、『イリアス』の理想化に釣り合っている、と言える。もちろんこの嘆きは詩人ひとりのものではない。聴衆と共有されたものであったに違いない。

の英雄に与えた作品での役割に対応し、役割を強化あるいは深化させるような盾の描写を組み込む方法をも『イリアス』から学んだのだ。英雄に体現させる作品の最も深い思想を盾の描写で実現するという方法を学んだのだ。そうであれば、2000年の昔、かのローマの詩人は『イリアス』の盾の描写と主人公の関係を理解していたことになる。

（北海道大学）